

教科又は教職に関する科目，初等教科概論 ほか

担当教員：山崎哲司・日野克博 ほか

## ディプロマ・ポリシーと授業評価について

理科教育講座・山崎哲司

### 1. 対象とした授業科目について

今回の授業アンケートで対象とした科目は、①「初等教科概論」(前期開講，教科又は教職に関する科目，2単位，学校教育教員養成課程・特別支援教育教員養成課程1回生対象必修科目)，②「教職教養課題特講Ⅰ」(後期開講，教科又は教職に関する科目，2単位，全課程2回生対象選択科目)，そして③「初等理科」(後期開講，小学校教科科目，2単位，学校教育教員養成課程・特別支援教育教員養成課程1回生対象センタ必修科目)である。①については山崎・日野が全体のコーディネートを務め，授業の一部(例えば理科の回など)も担当する。また，初等各教科の紹介については，関連講座の教員に依頼し，初等各教科の内容・意義について講話をしていただいている。②も山崎・日野が全体のコーディネートを務め，授業の一部(導入，まとめ，学生同士のグループディスカッションの回など全5回)も担当する。残りの10回については，松山市教育委員会指導主事，公立小・中・高教員，附属小・中学校教員などを招き，講話をしていただいている。③については山崎・熊谷で担当し，山崎は最初の回(二人で全体の説明)と残り7回について，小学校理科の『地学関連領域』を題材として授業を行っている。今年度の履修者数は，①149名，②89名，③67名である(全く授業に出席していない者も含む)。

各授業科目については，講座を越えて広く開講しているものなので，内容の説明をするまでもないと思われるが，念のために今年度のシラバスから，授業の目的と到達目標を抜粋して示す。

#### ①初等教科概論

##### 【授業の目的】

小学校の学習内容の全体像および初等から中等教育における小学校の役割について知る。

初等教育(学校教育)における各教科の意義を知り，各初等教科の概要および初等教育法との関連を理解する。

##### 【授業の到達目標】

1. 小学校の各教科の意義や目的を説明できる。

2. 小学校のカリキュラムとその役割について，概略を説明できる。

3. 初等・中等教育における教育課題の概略を説明できる。

#### ②教職教養課題特講Ⅰ

##### 【授業の目的】

本講義は，わかる授業実現のための教科指導力向上をテーマとするものである。近年，「学力低下」の問題が指摘され，教師の資質能力の向上が求められる。学校教育の中核は授業であり，わかる授業を実現し，確かな学力を保障するために，学校現場では，<よりよい>，またある面では<今までにない>，授業実践が模索されている。そこで，学校に通う喜びや楽しみと同時に，深く確かな<学び>を，すべての子どもたちに保障する教育実践について考え，実践的/経験的知識を習得することを目標とする。

##### 【授業の到達目標】

1. 教科指導力についての知識・理解を深め，自らの考えを述べることができる。
2. 教育現場の実践に学び，児童・生徒の実態に沿った問題解決を志向する態度を身につける。
3. 現在の教育課題について，実践的な自己教育課題を見いだす。

#### ③初等理科

##### 【授業の目的】

一般的包括的な内容を含む小学校教員免許状取得に必要な科目であり，小学校理科の「物質・エネルギー」の化学分野を中心に，そして「生命・地球」の地学分野を中心に学ぶ。

小学校教員にとって必要な，教科の基礎知識を習得するための科目である。学習指導要領に含まれる内容に関連した身の回りの自然や事物を，演示実験や授業例の紹介などを織り交ぜながら扱い，教材について考えるとともに科学的な見方や考え方を身につける。

##### 【授業の到達目標】

1. 小学校理科分野の基礎知識について理解し，原理を含めて説明することができる。

2. 気象用語や暦にまつわる用語など、日常的に用いられる言葉を知り、説明できる。

3. 事例に基づき教材の工夫についてグループで議論し、改善点を述べるができる。

4. 身近な自然や身の回りの現象について、グループワークなどを通して深く考え、発展的な内容を含む事象を、論理的・科学的に説明できる。

## 2. 授業評価の目的

平成 19 年度から 20 年度にかけて、学校教育教員養成課程および教職課程のディプロマ・ポリシー (DP) を作成したが、これら DP を、どのようにして活用するかという課題に対応することが必要である。DP の作成に合わせ、カリキュラムチェックリスト (CCL) も作成し、全教員に依頼をして、各自の授業と DP の対応関係を●で示していただいた。ただし、1つの授業科目に対する●の数が、教員間で余りにも違うため、カリキュラム・マップの作成時に、対応関係を◎、○、△で示す形に変更し、また数の制限を行った。

この作業は教員の自己申告であるため、学生による評価、すなわち各授業を受けた学生が、授業評価等を通じて授業内容と DP の対応について回答し、教員の作成した CCL と比較することで、CCL 自体の点検を考えていた。しかしながら、平成 21 年度にリフレクション・デイの試行を行った際に、DP 作成者側の意図と、学生が DP の文言から理解した内容にズレがあるということが明らかとなった。例えば、DP 4 (教職課程の DP) 「実践から学び、自己の学習課題を明確にして、理論と実践を結びつけた学習ができる」でいえば、DP 作成者としては“教育体験などの教育現場に関わる実践”から学ぶ、ことを意図しているのだが、音楽の学生にとっては、“楽器の演奏という実践”を行い、そこから自己の課題を見出して、“理論”(教員による指導など)と結びつけて学習をする、繰り返しを行っているので、DP 4 は達成できている、という評価をする者が続出した。言葉の解釈による DP 評価の食い違いは、教員間でも見られており、共通教育における学士基礎力 (共通教育の DP に当たるもの) のチェックでも、例えば専門基礎科目としての英語が、どの学士基礎力に対応するかについても、「基本技能」にチェックを入れると思っていたところ (例示として語学を入れていたため)、基本姿勢と基本的なコミュニケーション力に集中する、という状況であった。そ

れ以外にも、DP に関して「言葉の受け止め方」が個人によって異なることがいろいろと見られたため、CCL と学生からの評価を単純に比較するというだけでは、授業内容の点検にならないと思われる。

そこで、複数の授業で DP と授業内容の対応を質問し、また対応関係について理由を記述してもらうことにした。ただ、前期の「初等教科概論」については、従来から実施してきた授業評価アンケートや調査を同時に行ったため、対応関係の理由については、時間の関係上、省略をした。また、後期の 2 科目については、事前に教育コーディネーターから DP に関する調査のフォーマットが出されていたため、その質問形式も利用することにした。

## 3. 授業評価の内容

### ①初等教科概論

A 初等教科を学習する意味が理解できた

4 そう思う 3 ややそう思う 2 あまり思わない 1 思わない

B 各教科の意義が理解できた

4 そう思う 3 ややそう思う 2 あまり思わない 1 思わない

C 各初等教科の内容について理解できた

4 そう思う 3 ややそう思う 2 あまり思わない 1 思わない

D 初等教科概論は、次の「教職課程の DP」のどれに対応した内容だと思いますか。対応すると思われる番号に丸を付けて回答してください(丸は1~3個でお願いします)

1. 教科・教職に関する幅広い基礎知識と、得意分野の専門的知識を有している。

2. 学校現場で生じている問題を始めとして地域や社会全体に関わる課題について、適切な対応を考え議論することができる。

3. 児童・生徒の発達に応じた授業の構成や教材・教具の工夫ができる。

4. 実践から学び、自己の学習課題を明確にして、理論と実践を結びつけた学習ができる。

5. 教育的愛情を持って児童・生徒に接することができるとともに、多世代にわたる対人関係力を身につけ、社会の一員として適切な行動ができる。

### ②教職教養課題特講 I

#### A 【教育コーディネーターの質問事項】

DP1. 教科・教職に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を修得している。(知識・理解)

    1    2    3    4    

DP2. 学校現場で生じているさまざまな教育課題について論

じ、適切な対応を考えることができる。(思考・判断)

1 2 3 4

DP3. 子どもの発達に応じた授業の構成や教材・教具の工夫ができ、個に応じた指導や説明ができる。(技能・表現)

1 2 3 4

DP4. 実践を省察し、自己の学習課題を明確にし、理論と実践を結びつけた学習ができる。(関心・意欲)

1 2 3 4

DP5. 教職に対する使命感や責任感を身につけ、教育的愛情を持って児童・生徒に接することができるとともに、多世代にわたる対人関係力を身につけ、社会の一員として適切な行動ができる。(態度)

1 2 3 4

B それぞれについて、授業のどのような点(話の内容やディスカッションの内容など)が、各DPの向上度に結びついていると判断したのか、簡単に記述してください。なお、授業の内容がDPと結びついていないために評価が1となっている場合は、“授業とDPが関連していない”と回答してください。

DPの向上度に関する理由(自由記述)

DP1( )

DP2( )

DP3( )

DP4( )

DP5( )

### ③初等理科

#### A 【教育コーディネーターの質問事項】

DP1. 教科・教職に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を修得している。(知識・理解)

1 2 3 4

DP2. 学校現場で生じているさまざまな教育課題について論じ、適切な対応を考えることができる。(思考・判断)

1 2 3 4

DP3. 子どもの発達に応じた授業の構成や教材・教具の工夫ができ、個に応じた指導や説明ができる。(技能・表現)

1 2 3 4

DP4. 実践を省察し、自己の学習課題を明確にし、理論と実践を結びつけた学習ができる。(関心・意欲)

1 2 3 4

B 授業の内容にDP1～5が対応していたかどうか(向上したかどうか出はなく)、を教えてください。対応していたら、【 】に○、ほとんどしていない、またはしていなかったら×を付けてください。なお、対応していたとしたら、簡単にその理由を( )の中に入れてください。例えば、DP1に関しては、小学校の理科に

関する知識が紹介された、などです。

DP1【 】( )

DP2【 】( )

DP3【 】( )

DP4【 】( )

DP5【 】( )

## 4. 結果

回答数は、①が145、②が71、③が50であった。なお、①の問いA、B、Cについては、日野先生が用意していたアンケートと重なっていたので、そちらに回答するように指示をしたが、大半は回答をしてくれたので、集計した(そのため、少し回答数が少ない)。また、最終レポートの記述や試験の回にアンケートを取るという、学生にとり迷惑この上ない形でアンケートを取ったため、半分しか書いていないものも出て、回答数が一致しない項目もあることをお断りする。

### ①初等教科概論

	4	3	2	1
A	47	66	2	0
B	40	74	1	0
C	27	85	3	0

初等教科の内容については、1回で全て紹介するのが難しいため、教科によっては、ごく簡単に済ませていた結果が現れている。ただし、各教科の意義や初等教科を学習する意味という、この授業の主要な目的については、おおよそ伝えることができたのではないかと考える。

#### ・DPに関して

5年間、この授業をコーディネートしてきた(次年度からは交代)。その私の意識でいえば、この授業については DP1 ◎、DP2 △、DP3 △～○、DP4 ×、DP5 ×である。学生が○を付けた数は、

DP1	DP2	DP3	DP4	DP5
93 64%	45 31%	70 48%	45 31%	26 18%

(パーセントは回答数145に対する割合)

DP4を除くと、おおよそ一致している。

### ②教職教養課題特講 I

問いAについて、回答数を次に示す。

	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5
4	10	20	10	12	22
3	44	46	42	44	45
2	13	5	19	14	4
1	4	0	0	1	0

この授業も次年度から担当者交代となるが、4年間実施してきた担当者としては、DP1 ×、DP2

◎, DP3 △~○, DP4 ×, DP5 ○である。予想以上に全 DP について3と4が多いが、1と2の数などから、多少は担当者の意図に近い傾向は伺える。この科目については、向上に結びついて内容を具体的に記述してもらっているため、代表的なものを以下に挙げる（括弧内は記入者数）。

DP1:外部講師 18), 全体の内容 (11), 理科ねっとわ〜くの紹介 (5)

DP2:外部講師 (42), ディスカッションの回 (9), 全体の内容 (5)

DP3 : 外部講師 (30), 理科ねっとわ〜くの紹介 (8), 全体の内容 (3)

DP4 : ディスカッションの回 (15), 毎回のレポート (9), 外部講師 (9)

DP5 : 全体の内容 (23), 外部講師 (16), ディスカッションの回 (8)

### ③初等理科

問い A について、回答数を次に示す。

	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5
4	6	0	2	3	3
3	40	21	22	33	17
2	3	25	25	14	27
1	1	4	1	0	3

この授業(少なくとも私の担当回)については、DP1 ◎, DP2 ×, DP3 △, DP4 ×, DP5 ×である。DP1 については当然の結果と思われるが、それ以外は、DP5 がやや低く、DP4 がやや高い、という程度の差でしかない。ただし、問い B の授業内容との対応（向上度ではない）を○×で記入してもらった結果を見ると、

	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5
○	46	12	32	35	9
×	2	36	16	13	39

(○×の記述がない回答数2のため、総数48) DP4 を除き、ほぼ担当者の意図に近い結果が得られた。なお、DP1 に×を付けた2つについては、片方は全てを×に（ただし向上しているかの問いには全て3で回答）、もう1つも DP1 の向上度を3としている。回答の中にはこのようなものも含まれていることは、仕方がないことなのだろう。

各 DP の具体的な理由はばらつきが大きい、ある程度の数があった回答は、

DP1 : 小学校の内容を含む専門的知識 (38)

DP2 : 実験方法の紹介 (3), 現場で指導する時の注意 (3)

DP3 : 実験方法の紹介(10), 教材の紹介 (8), 授

業の工夫や注意点を紹介 (3)

DP4 : 自分の課題を毎回のレポートで把握 (13), 月の観察で実践と理論を結びつけた (6)

DP5 : 理科が身近なことに関連していて重要なことが分かった (3)

### 4. まとめ

今回の3科目についていえば、DP と授業の対応関係について、授業者と受講生との意識に極端な相違はなかったと思われる。ただし、地球科学の結果に見られるように、「向上したか」という問いよりは、「対応していたか」という問いが適切なのではないか、とも思われる。教職教養課題特講 I のアンケートには、「向上度に関する理由」として、「いろいろな授業で向上した」という回答があった。もしその授業で向上したと思われても、実は同時期に受けた他の授業の影響も大きいのではないかとと思われる。他にも、「向上した」という尺度が不明確なので、DP という資質を考えた時の到達度をイメージして、まだそれ程向上してはいないために「3」という回答も見られた。個々の授業で向上度を問うのが適切かどうか、検討することも必要と思われる。全体としての DP に対する評価はリフレクション・デイでも扱うため、そちらの機会がより適切なのではないか。

また、例えば DP2 “児童・生徒の発達に応じた授業の構成や教材・教具の工夫ができる。”に関して、地球科学の回答では、教材は授業で扱ったが、子どもの発達段階は扱っていないので授業内容と対応していない、という回答があった。確かに、DP をそのまま読めばそうした回答になるのだが、学年毎のつながりや他教科とのつながりも話している。各 DP と授業内容の対応を尋ね点検するためには、平成 20 年度の CCL で試みたように、各 DP をもう少し細かく分解して、問いかけることも必要であろう。

DP4 の不一致の問題については、レポートや課題によるふり返りと自己の課題の発見をどう捉えるかである。「それは授業として当たり前でしょう!?’という気持ちもあるが、ふり返りを課していない授業も存在することは否めない。また、学生がそのような学習をしていることについては、リフレクション・デイ等のリフレクションの際に評価をする形が必要ではないかと、今回の作業を通じて考えた。その他、字数の関係で省くが、この結果をリフレクション・デイ等に活用したい。